



鍛える

校長 冨田 操

本当にいつまで続くのか・・・という感染状況ですが、学校では3年ぶり、2年ぶりの行事が次々と戻ってきました。音楽会・球技大会・芸術鑑賞会・・・行事に取り組む子どもたちの真剣な顔、生き生きとした顔、笑っている顔・・・今まで「行事が無い分、代わりに授業をしっかりと楽しいものにしていこう！」と頑張ってきましたが、やはり代えがたいものもあったのだ、ということに今さらながら子どもたちの顔を見て気づかされます。感染状況を見極めながら、できる範囲で、できることをできるだけやっていかなければと思います。

とは言え、その行事と共に、やはり日々の授業が一番大切であることには違いありません。小学校というところは、これから子どもたちが生きていく上で必要になる全ての学問・学習の礎となることを学ぶ場です。そして、小学校は、「学ぶ」ことそのものが「学ぶことの目的」になっている、純粹に「学ぶ喜び」を感じられる場だと思っています。

子どもたちを見ていると、子どもは、本来「学びたい。分かりたい。伸びていきたい。」と願う存在なのだと感じます。もともと、人は、「今より少しでも良くなっていきたい。」と思うのが本来の姿なのだとすることを思い起こさせられます。

だとしたら、私たち学校はその子どもの要求に応えなければなりません。そして、子どもが「自分が成長した」と実感できるところまで子どもの力を伸ばすことが大事です。

そのためには、子どもを「鍛える」という視点はどうしても必要だと思っています。「鍛える」という言葉は、最近は何となく敬遠される言葉になってしまったような気がします。いつごろから「鍛える」という言葉がなんとなくネガティブな響きをもつようになったのでしょうか。

「鍛える」ということはもともと子どもの人権や尊厳を脅かすものでは決してなかったはずです。それは、大人たちが子どもに向けて最も大きな愛情をもって行っていたはずのものだったのではないかと思うのです。

もちろん、鍛えるという言葉を使いながら行われた人権を無視した「しごき」のようなものは、学校では決して受け入れられるものではありません。しかし、「この子どもたちを、しっかりと育てる」と決意し、一時的に、子どもに疎まれようとも、子どもの成長を求めていくことが、子どものことを大事にしていけないと言えるはずがありません。

大きなおおきな愛情をもって子どもをしっかりと鍛え、大事にだいじに育てる。これは、私たち大人に求められていることであり、学校においては大きなミッションの一つなのだと思います。

「教育」は、本来一見ゆったりとした、優しさにあふれた、穏やかなやり取りの中にそのような厳しさ抜きでは成立しない営みなのだと思います。そして、それは深い愛情によって裏打ちされたものでなければならないのは言うまでもありません。

保護者の皆様、地域の皆様。学校で、家庭で、地域で、共に子どもたちを深い愛情で鍛え、しっかりと自分で進んでいける人に育てていければと思います。

今月もご支援のほどよろしくお願いいたします。